

船用・陸用ガバナーを修理販売 中島ノズル株式会社（佐世保市）

今回は「中島ノズル株式会社」（〒857-1162 長崎県佐世保市卸本町250-1、中島祥一（なかじま・しょういち）社長、☎0956-31-2246）を取材した。同社は1960年（昭和35年）1月創業。創業当初は燃料噴射ポンプの修理販売を手がける個人商店として事業を開始した。

現在はエンジンやタービンの回転速度を一定に保つ高性能なガバナー（調速機）など、発電設備用から大型エンジン用のWOODWARD（ウッドワード）、BOSCH（ボッシュ）ガバナーといった機器の整備も行っている。その中心となる本社工場は、1978年（昭和53年）よりWOODWARD社の認定サービス工場として、陸用発電設備、各種プラント、船用エンジン用のガバナーの修理販売に関して品質の高いサービスを提供している。

今年で創業53年目を迎えた中島ノズルの取り組みについて紹介する。

創業の経緯

中島ノズルの創業者は中島閏（なかじま・じゅん）氏。1910年（明治43年）、現在の群馬県安中市に生まれた。2代目となる現社長の中島祥一氏の実父である。

中島閏氏は大東亜戦争の戦前に、電機学校（現東京電機大学）を卒業し、東京通信工業（現ソニー）、ライト自動車、ダット自動車、戦車関係の仕事をしていた日本特殊鋼で働いていた。また、戦前、池貝自動車が設立されるのにあわせて、閏氏は関連企業の池貝鉄工（三田工場）へ仕上工として入社した。間もなく神奈川県川崎市に新設された燃料ポンプ工場（川崎工場）へと移り、燃料ポンプ装置の加工組立や組立後の調整を担当する技術者として働いていた。

しかしながら、戦時中に、中島閏氏は池貝鉄工を退職した。そして、小形ディーゼルエンジン用燃料



中島祥一社長⑤と中島洋三専務



ウッドワード社からいただいた認定サービス工場の認定証噴射ポンプを研究していた早稲田大学理工学部（当時）の関敏郎教授のもとで実験助手として勤めた後、埼玉県久喜市の日本ノズル工業（現日本ノズル精機）へと転職した。

職業を移動する行為が原則として禁止状態に置かれた戦時下にあって、この転職行為は異例といえよう。恩師の関敏郎教授との固い絆の上に実現できたことは、中島閏氏が寄せた恩師を「追想」した一文からもうかがえる。

戦後の1946年（昭和21年）、中島閏氏はビルマ（当時）より帰還し、日本ノズル工業へと復職した。米国の物資輸送船舶運航会社や旧佐世保海軍工廠の造船施設を継承した佐世保重工業（長崎県佐世保市）との活発な取引を手がけるようになった。そうした



ウッドワード社の認定サービス工場を記した盾

取引関係もあり、閨氏は1955年（昭和30年）に埼玉県久喜市から長崎県佐世保市へと転居し、その後の1960年（昭和35年）1月、佐世保市内で個人商店「中島ノズル工業所」を設立した。設立当初は船用ディーゼルエンジンの燃料噴射ポンプ・燃料噴射弁の修理販売に携わり事業を拡大していった。

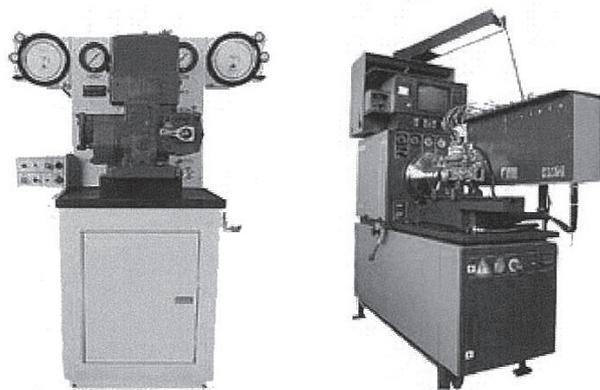
事業の変遷

中島ノズル工業所は1968年（昭和43年）、船用部門に続いて、陸用部門にも進出し、現デンソーの自動車用の燃料噴射ポンプ・燃料噴射弁などを取り扱うようになった。

事業の発展に伴い、1970年（昭和45年）1月に「有限会社中島ノズル工業所」を設立し、法人組織へと移行した。1973年（昭和48年）5月、佐世保市卸本町28-2への移転を機に、ガバナー部門を新設した。燃料噴射ポンプ、燃料噴射弁、ガバナーという3つの機器を一体型製品として自社内で取り扱い、より効率的なサービス提供に努めた。

1985年（昭和60年）12月に「中島ノズル株式会社」へと組織変更を行った。1993年（平成5年）2月に現住所の佐世保市卸本町250-1へ移転し、現在に至っている。主な事業としては、ガバナーのテストスタンドやディーゼル噴射ポンプのテストスタンドを備えて、船用及び陸用ディーゼルエンジンの油圧ガバナー、船用及び自動車用燃料噴射ポンプ・燃料噴射弁の修理販売を行っている。

中島ノズルは、事業規模の拡大と並行して、さまざまな業務改善にも積極的に取り組んでいる。2000



ガバナーのテストスタンド ディーゼル噴射ポンプのテストスタンド

中島ノズル株式会社 環境方針

1. 当社の取扱製品であるディーゼルエンジン用燃料噴射装置の最適な整備を通して、汚染予防及び環境マネジメントシステムの継続的改善に努める。
2. 環境関連法規、条例及び当社が同意する要求事項を順守する。
3. 環境目的及び目標の設定及びレビューを毎年実施する。
4. 当社で働く又は当社のために働く全ての人に周知する。
5. この環境方針は、広く一般に開示する。

2006年10月16日
中島ノズル株式会社
代表取締役社長 中島祥一

年（平成12年）3月に品質マネジメントシステムに関する国際規格ISO 9002、2003年（平成15年）3月にISO 9001、2006年（平成18年）12月に環境マネジメントシステムに関する国際規格ISO 14001の認証をそれぞれ取得した。

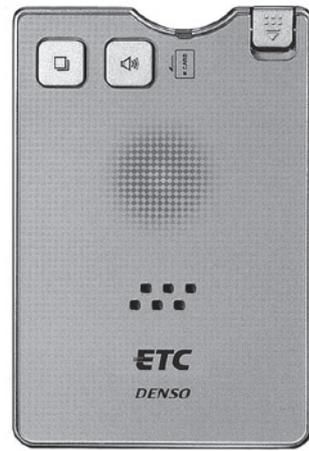
また、2006年（平成18年）10月に「環境方針」を自主制定した。その中で、ディーゼルエンジン用燃料噴射装置の最適整備を通じて、大気汚染の予防防止や地域の環境保全を図るために貢献していく内容の決意表明を行った。

日本初のウッドワード社認定サービス工場

中島閨氏は1968年（昭和43年）、ヨーロッパのディーゼルエンジンメーカーなどを巡る視察会に参加した。視察を通じて、エンジンの回転速度を自律的に調整するガバナーの重要性を深く認識させられたという。その時の経験に基づき中島ノズルは1978年（昭和53年）、ディーゼルエンジン燃料噴射システ



車載用プラズマクラスターイオン発生機



業界初の光るETC（車載器）

ムのほか、ディーゼルエンジン発電機用、船用ディーゼルエンジン用、建設機械ディーゼルエンジン用の油圧ガバナー・電気ガバナー・電子ガバナーのリードカンパニーであるウッドワード社から「認定サービス工場」として認定された。

今後注力する分野

中島ノズルは現在、山口県から沖縄県までを営業エリアとし、エンジンメーカー、造船会社、電力会社、石油化学プラント、自衛隊や米軍に対し、ディーゼル用やタービン用のガバナー整備を積極的に売り込んでいる。

中島洋三専務の説明によると、直近の売上構成比はガバナー45%、燃料噴射ポンプ45%、その他部品販売10%の順。そのうち、ガバナーは船用部門60%、陸用部門40%。燃料噴射ポンプは船用部門80%、陸用部門20%の順。いずれも船用部門の売上構成比が高いとしている。

中島祥一社長は、最近の市場の動向について電子制御ガバナーが主流となっている点、電子燃料噴射装置（コモンレール式）の需要増加が見込まれる点の2つを指摘した。作業工程の管理能力の強化及び整備技能の向上に努めて、これら2点の分野で今後の受注拡大を図りたいと抱負を語った。

中島 関

— 関先生と弟子の思い出

関さんとの出会いは、今より半世紀ほど前です。戦前、池貝自動車が設立されることになり、日本特殊鋼より、戦車関係の仕事をしていました者と一緒に池貝鉄工三田工場に、仕上工として移動しました。間もなく川崎工場ができました。関さんは当時、設計課長でした。私は池貝では、燃料ポンプ工場の組立及び調整でした。当時ディーゼル機器が活動していませんでしたので、関さん設計のスピル型を変更、急いでポッシュ型を製作することにしました。

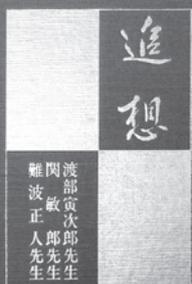
設備も加工もすべて初めてのこと、関課長、島本係長の指導により曲がりなりに実用に供することができました。それより五十年、今でも燃料ポンプ、ノズルと縁が切れません。ノズル製作では、噴口の大きいピントル型はできましたが、スロトルノズルはできませんでした。

当時スロトルノズルは、日本ノズルが納入しておりました。それをテストするのにどうすればいいかと、その時苦慮しておりました。関課長のアイデアで、細かくセパレートした回転円板に噴射すればスロトル部と主噴の部の噴射量が解明できるとの指導でありましたが、実用に供するまでにはならなかったと記憶しています。その後、ストロボを設備し、テストベンチと同期させてみましたが、現在もまだはつきりしたテスト性能はなく、ノックも五十年前とあまり変わりません。

関さんは早稲田に行かれ、私も日本ノズルにスカウトされました。この時も関先生には大変お世話になりました。池貝を退職し、一時、早稲田大 学理工学部実験助手としてお世話になり、日本ノズルにかかりました（戦中の転職は大変軍がうるさかったのです）。

昭和二十一年、私はビルマより帰還し、関先生を戸塚のお宅にお訪ねしました。日本ノズルの顧問をお願いし、戦後の再建にいろいろとご指導をいただきました。

昭和三十五年、佐世保に中島ノズルを設立。昭和四十三年には、関先生、日野自工の福岡重役と私、他三名でヨーロッパへディーゼル機関の視察に行き、その経験からウッドワード社他のディーゼルポンプメーカーの代理店となりました。関先生は、佐世保にも三回程お見えになられ、その時もご指導をしていただきました。



その他、たくさんのお話がありますが、紙面も少なく残念ながら割愛させていただきます。今はなき関先生も、弟子である私の心の中に永く生き続けてくださることでしょう。

（中島ノズル工業 代表取締役）